



Osaka Gakuin University Repository

Title	キレーエフ将軍の日記（1905 - 1910 年）から見た皇帝ニコライ 2 世と皇后アレクサンドラ Emperor Nicholas II and Empress Alexandra, seen from the diary of General A.A.Kireev, 1905-1910
Author(s)	広野 好彦 (HIRONO YOSHIHIKO)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 29 巻第 1・2 号 : 23-43
Issue Date	2018.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

キレーエフ将軍の日記（1905－1910年）から 見た皇帝ニコライ2世と皇后アレクサンドラ

広 野 好 彦

Emperor Nicholas II and Empress Alexandra, seen from the diary of General A.A.Kireev, 1905-1910

HIRONO YOSHIHIKO

ABSTRACT

General A.A.Kireev, once as an adjutant of Grand Duke Konstantin, taking part in the suppression of the Polish rebellion, and a militant Slavophile activist and member of "Homeland Union", kept a detailed diary. It contains a lot of useful information about the imperial families, high societies in Saint-Petersburg, and political and religious opinions of leading people at that time – bureaucrats, officers, members of Slavophile parties and so on. Therefore, it has been evaluated as a helpful material on Russian political history.

The purpose of this article is to describe the thoughts and acts of General A.A.Kireev. He insisted that the National Convention should be assembled to keep in order the turbulent society and to invigorate the autocracy at the time of the first Russian Revolution. Second, this article is to depict how Emperor Nicholas II and Empress Alexandra reacted to the Revolution, mainly relying on the diary of General Kireev from 1905 to 1910. In this era, he appealed to not only Emperor but also Empress to realize the plans of his party. He recognized that the latter had an influence on the former. But generally, Empress was thought not to be interested in politics before the World War I and to exert no influence. Finally, by the diary we will find that Empress Alexandra has been isolated from the society in the palace and indulged in the mysticisms, leading to the demise of the dynasty.

はじめに

アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・キレーエフ（Александр Алексеевич Киреев）将軍の名前を私が初めて見たのは、ニコライ2世（Николай II）の評伝中である。印象に残ったのは彼が、アレクサンドラ皇后（Александра Фёдоровна）に好意的な評価をしていたからである。皇后を弁護する人物は少ないのである。

キレーエフによれば、アレクサンドラが、1894年にロシアに到着する以前、ペテルブルクの社会は、彼女を「将来の皇后は難しい性格である」と中傷していた。しかし彼は次のように弁明している。「若い皇后は愛すべくかわいらしい。しかしとても簡単に困惑し、話をするよう強く励ますことが必要である。ペテルブルクの上流社会の馬鹿どもが何と言おうと、彼女には恒常的に退屈なものはなく、大いにはにかんでいるだけだ¹⁾」。

ニコライ2世の評伝にキレーエフが引き合いに出されるのは、彼が詳細な日記をつけていたからである。彼の経歴を見てみよう。キレーエフは1833年生まれ。陸軍幼年学校卒業後、近衛騎兵連隊に勤務、1853-1856年のクリミア戦争に参戦。1862年、コンスタンチン・ニコラエヴィチ（Константин Николаевич）大公の副官となる。1863年にはポーランド反乱鎮圧に加わった。1892年の大公の死まで副官を務めた。死後も大公の家族とペテルブルクのパヴロフスク宮殿に居住した。1907年には騎兵大将に昇進している。また1905-1906年においては、政治にも参加し、右派の「祖国同盟」の指導部に入った。1910年没。

キレーエフ将軍はこのように、軍人としてコンスタンチン・ニコラエヴィチ大公に仕え、大公の死後も彼の家族とともに暮らしたことからわかるように、皇帝の取り巻きに近く、高級官僚、将校などと知り合いであった。さらに彼がものすごく事情通であったために、彼の日記は、政治史に関する豊かな情報源と評価されている。幸いなことに、1905年から1910年にわたる日記の部分が公刊されている²⁾。日露戦争、第一次ロシア革命、

1) Dominic Lieven, *Nicholas II Emperor of the Russians*, London, 1993, p.57.

2) Дневник А.А. Киреева. 1905-1910., М., 2010. なお、引用文中の括弧や下線等は、

ドゥーマの活動などで彩られる時期である。

以下においては、このような多難な時代において、ロシアをいかに復興させるかというキレーエフの活動がまず追究される。簡単に言えば、全国大会を招集して、専制に生気を与えることである。この問題それ自体重要なものであるが、筆者の関心はそれ以外に、皇后の政治力がどの程度のものであったのかに関心がある。皇后の政治関与については、第一次世界大戦期において、ニコライ2世が総司令官として前線に出た時期の研究がある³⁾。それ以外は、史料的な問題もあり、皇后が政治に関する公的なポストにはついていないことなどから、あまり明確ではない。1918年、トボリスクまで、アレクサンドラ皇后に付き従った女官ソフィー・ブックスヘーヴェデン（Sophie Buxhoevendén）によれば、皇后と政治の関係は次のように評される。

「皇后は世界大戦までは政治問題に関心を抱かなかった。1905年の突然の事態は、彼女を大いに困惑させた。その後においては、問題が立ち現れそうになっても、皇帝は、家庭において政治的問題を決して議論しないという習慣を続けた。…皇后には自分の関心があり、この時期、いかなる公的問題にも影響を行使しなかった⁴⁾」。

拙稿の意義があるとするれば、第一次ロシア革命から第一次世界大戦までは、皇后の政治関与はなかったとする通説に対して、皇后に好意的な人物の定点観測を用いて、検証の試み、いやその検証の準備作業をおこなおうとするものである。なお暦は、露暦が使用されている。20世紀においては13日を加えれば、西暦に換算できる。

断りのない限り原文のままである。

- 3) Joseph T. Fuhrmann (eds.), *The Complete Wartime Correspondence of Tsar Nicholas II and the Empress Alexandra: April 1914-March 1917*, Westport, 1999, pp.1-12.
- 4) Baroness Sophie Buxhoeveden, *The Life & Tragedy of Alexandra Feodorovna Empress of Russia*, London, 1929, p.110.

※

公刊されたキレーエフの日記は1905年1月1日から始まるが、極東でおこなわれている日露戦争の行方もさることながら、むしろその戦争によるネガティブな影響のために、ロシア国内が騒然とすることに日記記述はあてられる。「血の日曜日事件」をきっかけとするストライキ等の権力に対する反発は、またたく間にロシア全土に広がった。キレーエフは、この混乱を收拾するためには、全国大会の招集が必要であると考えた。全国大会は、結果としてドゥーマ（国会）に展開していくものであった。そして彼は、自己の人脈を駆使し、皇帝や皇后の側近に近づき、政策的提言をおこなう。2月5日、皇帝の叔父にあたるセルゲイ（Сергей Александрович）大公がテロで暗殺された翌日、彼はフレデリクス（Владимир Борисович Фредерикс）宮内相に対して全国大会の意義に関する短い覚書を提示する。ツァーリのためである。

「これが論旨である。1）全国会議は諮問会議的意義だけを持つ。それは諮問されるが、決定はしない。（そのことにより、立憲的議会と区別される）。2）それに対しては、行政のすべての行動に関する質問の権利が自由に与えられる。3）法案を提示する権利。4）ツァーリの会議…提案に対する不同意は、理由が示されるべきである。構成。堅固であるのはただ、民衆史（先例）に基礎を置くことだけである。先例は私たちのところにある。ロシア民衆の創造的力を疑問視する人だけが、外国で作られた、立憲制度を採用するように助言している。私たちにおける全国大会は、私たちの歴史が作り上げた古い制度を再興するだけである。国家制度は、社会経済的風習、民衆の積極的な道義的ならびに精神的志向に合致するべきである。決定的意義を持つことになるのは、国富の生産において最も活発に参加している階級がいることである。最大限の利害者、富を生産している農業経営者は、この実施の中で発言権を保証されるべきである。主として、私たち地主。当然のことながら、自由業、精神的利害もまた代表されなければならない。（1905年2月5日）」

キレーエフの主張を単純に理解すれば、全国大会とは、ロシア皇帝の諮問機関である。法案の提出や行政監督はおこなえる。ただし法案の決定権は皇帝に留保される。要するに全国大会は立憲主義者が唱える、皇帝の権利を制限する立憲主義的なものではなく、皇帝専制を補完するものである。またこのような諮問機関はロシアの先例に由来している。その構成も身分制に基づくものが前提とされる。ここでは明示されていないが、ロシアの身分制議会であるゼムスキーソボルを理想化したものであると考えることができる。

ここからキレーエフの立ち位置が分かる。彼はスラブ主義者である。ロシアの専制を僕として全身全霊で支える。しかしそれを盲目的に支持するのではなく、ロシアの先例や慣習に基礎を置いた、漸進的な改革を支持する。当面の敵は、ロシアの統治機構を西洋の理論にしたがいが改革しようと努める立憲主義者である。

2月18日、皇帝はブレイギン（Александр Григорьевич Бульгин）内相にあてて勅書を出した。人民の信任を与えられ、選出された人々を法案の予備的作成と審議に参加させることを指示。そのために特別審議会を設けることを表明した⁵⁾。ここにキレーエフの表現する全国大会の動きが具体化する。

キレーエフに特徴的なのは皇后に対しても同種の働きかけをおこなっている。日記からは、皇后の側近であるマリア・ミハイロヴナ・ゴリツィナ（Мария Михайловна Голицына）を通じて（4月21日）、またナルイシュキナ（Елизавета Алексеевна Нарышкина）を通じて（5月16日）、彼は皇后に書簡を送っている。その書簡の内容は日記には記載されていない。しかしその内容については、5月28日における、皇后とキレーエフの謁見が参考になる。

「本日若い皇后にお目にかかる。当然、率直に話をするであろう。直接的な質問をして、全国大会の支え、助けなしにはすまないこと、別のやり

5) 田中陽児、倉持俊一、和田春樹編『ロシア史2：18世紀～19世紀』山川出版社、1994年、352頁。

方では真実を知ることができないし、失われた威信（それなしには統治はできない）を復興することができないことについて話をするであろう。大臣たちと一緒にあらゆる問題を決定する必要性について話をするであろう。大臣たちによる。全国大会は必要とされる人材を与え、彼らを指し示すであろうということについて。平和または戦争は、大会が決めるであろうことについて。私たちの戦争は公正ではなく、いかなる利害も私たちは極東にないし、なかったこと、これは愚かで犯罪的な冒険であるということ。じっと辛抱しているであろうか？これは少なくとも時間が必要であろうから。

皇后のところに行ってきた。私は長い間、彼女に会っていなかった。今や長く話をして、最初（以前）と同様に、彼女の魅力にまたぞろ嵌った。次のような言葉を聞くのは重苦しかった。あなたは何をお望みですか、私たちのところには愛国主義はありません。…両陛下は全国大会が皇帝に憤激しないか、立憲主義的議会に変貌しないか恐れている。私は、すべては、全国大会がどのような分子から構成されるのかにかかっていると説明をした。これらの分子が保守主義的であれば、何も恐れることはないと説明した。…」

ここではキレーエフが皇后に対して政治向きの話をおこなっていることがうかがえる。彼は持論の、全国大会の助けなしにロシアの復興は難しいこと。それにより人材が供給されること。すなわち、ここでは明示されていないが、官僚制的専横が専制の輝きをくもらせ、それを打破するために、人民の賢明さに頼る必要があるということである。さらに、大会がこの時点で遂行されていた日露戦争と講和の問題を解決するであろうこと。日露戦争は公正ではなく、ロシアの利害は極東には存在せず、戦争自体が冒険主義的であるということも述べられている。

この日の会談ののちに、キレーエフは、皇后はロシアに愛国主義がないと述べたことに失望し、全国大会が皇帝に憤激して立憲主義的議会に変貌することを恐れていると指摘している。キレーエフは大会が保守的分子により構成されれば、その心配はないと皇后に反論をしている。

この後、キレーエフは自ら政治の世界にも飛び込み、自己の見解を実現するため、専制を支持する「祖国同盟」に加わった。その仲間とともに6月21日、皇帝に謁見をしている。

ニコライ2世の日記のこの日の項目にキレーエフの名前が見える。

「フェルムにおいて、元老院議員ナルイシュキン（Александр Алексеевич Нарышкин）、ボプリンスキー（Боблинский В.А.）伯爵、キレーエフ、パーヴェル・シェレメトフ（Павел Шелеметов）等と数人の農民を引見。彼らは、「ロシア民衆同盟」の声明を持っていた。それは地方自治会と都市活動家に対抗している⁶⁾。」

キレーエフの同じ日の記述によれば、この謁見の目的は「立憲主義はロシアを修正することはなく滅ぼす」との懸念を表すことである。これに対して皇帝は、「全国大会は旧習にしたがい、その形式は状況による」と返答した。キレーエフは皇帝のこの態度を立憲主義者を怒らせないための策略と考える。キレーエフ自身は、皇帝と皇后に対して、保守政党に依拠することを進言する。

全国大会、あるいはドゥーマをいかに導入するのかということは、ブルーイギン内相主導で行われた。諮問的なものが導入されるはずであった。キレーエフは喜ぶべきはずであるが、そうではなかった。ドゥーマの機能ではなく、それをいかに構成するべきかに関してブルーイギンの案に異論があったからである。

このため自己の案を採択するように、皇后に働きかけている。7月8日には、ゴリツィナを通じて書簡と自己の案を渡す。7月16日には、皇后に対して書簡を書く（ゴリツィナを通じるのかどうかは記述されていない）。また翌17日には、全国大会問題を議論するために、皇帝のもとに、祖国同盟からコンスタンチン・コンスタンチノヴィチ（Константин Константинович）大公と元老院議員ナルイシュキンが招かれたが、これは皇

6) Дневники императора Николая II 1894-1918, т.2, ч.1, стр.42. なお、1905-1910年において、キレーエフの名前がニコライ2世日記に出るのはこのみである。

后に対する書簡の影響であると彼の意見が記されている。さらに、この日の記述には皇后に対する書簡の大意が記されている。

「もし私が、指導者として全国大会の静かな運営を保障するとすれば、この大会が私たちの綱領に基礎をおいて招集されるという条件のもとにおいてである。もしブレイギン案が採択されるなら、私は引き受けた義務を拒否するのである。」

8月4日、ブレイギン案が結果として採択される。設置されるドゥーマの機能は諮問的であり、国家評議会の下位に位置し、立法権につき予備的議論が許された。同時にドゥーマ議員の選挙権は厳しく制限された。三つの選挙人区分、すなわち土地所有者、農民、都市住民が作られ、その内部で多段階の間接選挙がおこなわれることになった。キレーエフの批判は、おそらく聖職者階級がドゥーマに入るべきであったということなのであろう。ブレイギン案とキレーエフたちの案の差異にそれほど大きな意味があったかどうかは疑問である。それよりもむしろ彼が皇后に対してこの件について働きかけているのは興味深いところである。

※

ロシアの混乱はブレイギン・ドゥーマによっては抑えられなかった。10月、鉄道員たちの経済問題を原因とするストがゼネストに発展。都市への物資運搬が停滞し、経済活動がマヒし始める。ウィツテ（Сергей Юльевич Витте）は皇帝に対して、事態打開のために、改革かあるいは軍事独裁によるスト弾圧を提起した。皇帝は、立憲主義的な10月17日の詔書を出すことを余儀なくされた。独裁者に予定されたニコライ（Николай Николаевич）大公が、状況を判断し軍事独裁者になることを断念したからである。10月17日の詔書には、キレーエフを怒らせる、西洋立憲主義のあらゆる要素が含まれていた。人身の不可侵、良心・言論・集会・結社の自由、普通選挙原理の発展、いかなる法もドゥーマの承認なしには効力を持たないこと、

選挙人区分に従前のものに加えて、労働者が付加された（もっともそれで労働者が有利になったわけではない）。

キレーエフは、10月26日に72歳になったが、その日の日記において「主よ、なぜ私は2年前に死ななかったのか？より正確には、日本との愚かな戦争の前である。」と嘆いている。

「その戦争は、私たちの西洋的専制の崩壊に至らせた。その専制は、とても悲惨なことであるが、どこにおいても役に立たず、私たちをしてさらにいっそう悲惨な10月17日、すなわち憲法宣言にまで至らせたのである。しかもそれは非常に民主的、すなわちユダヤ的である。ウィッテの約束は実施された。忍耐してください。あなたには憲法があるでしょう、しかしそれはひどいものであろう！／長い書簡をフレデリクスに対して書いた。彼はそれをツァーリ、ひょっとすればツァーリツァに示すであろう。彼女は相変わらずツァーリに対して影響力があると考えている！工場労働者と知識人のためにドゥーマを拡張することの危険性と非合理性を説明した。もしドゥーマを拡張することを望むならば、公平の点からしても、聖職者階級にドゥーマに対するアクセスを与え、相対的に保守的分子を強化する必要があるだろう。」

このような絶望と怒り（その過剰のために10月17日のマニフェストに差別的な言辞が弄されている）にもかかわらず、彼はフレデリクスに対して書簡を書いている。皇帝や皇后に対する働きかけを期待している。その中ではドゥーマを拡張するならば、聖職者階級にドゥーマに対するアクセスを与えるよう進言している。ドゥーマの構成が悪いというのは彼の持論であった。

さらに第1ドゥーマ開会を控えて、キレーエフは、ナルイシュキナを通じて皇后に、いかにドゥーマを迎えるかを伝えている。

「(良い、完全な綱領の必要性) すべての官庁に関する準備された綱領をもってドゥーマに登場する必要がある。それを問題の本質に導き、現実問

題に直面させるためである。そうでなければ、それは「演説」を始め、当然、ほらを吹いて革命になるであろう。口達者を処理することは困難であろう。この選挙の場合ほど、鉄面皮が、穩健と真理に勝利を収めたことはかつてなかったであろう。疑いはないが、民衆はまだツァーリ、ロシアの統一性、教会に賛成である。(1906年3月27日)』

すなわち政府がよいプログラムを提示して、ドゥーマをして「ほらを吹か」さずに、すなわち空論に走らせず、現実問題に直面させることが重要である。5月13日、ドゥーマでゴレムイキン (Иван Логгинович Горемыкин) 首相の包括的な演説があったことに際して、「本日は記念すべき日である。政府が自己の綱領を提示し、ドゥーマがそれを退けた。綱領は受容可能である。しかしドゥーマは、明らかであるが、原則的にあらゆる政府の提案に敵対的であり、すべてを欲するか (去れ、君の場所を私が占領するため)、あるいは無である。明らかであるが、彼らにすべてを与えることはできない。対立を引き起こせ。」とある。

4月27日に開会した第1ドゥーマは、土地問題を巡り政府と激しく対立した。7月9日、ドゥーマは解散された。キレーエフは、予想される第2ドゥーマの選挙に対して、あらゆる手段を使って、すなわち選挙干渉をもおこなっても、政府に忠実な政党を勝たせることを皇后に訴える。

「M.M.ゴリツィナに手紙を書く。(若い皇后に対して) 選挙に対して影響力を行使する、あらゆる手段を行使する政府の必要性を述べる。何をなすべきか。私たちには憲法がある。「狼とともに生き、狼にしたがって吠える。」(1906年7月20日)』

第2ドゥーマは、1907年2月10日開会。いわゆる「6月3日のクーデタ」により、社会民主労働党議員が逮捕され、ドゥーマは解散となり、地主階級に有利な選挙法改正が行われた。

こののち、1907年7月4日、騎兵大将に昇進したことにに関して、キレーエフは皇帝に謁見を受けた。ニコライ日記には「16人の昇進の推薦を受け

たものを引見した⁷⁾」とあるだけだ。キレーエフ日記によれば、彼は皇帝に対して君主主義的政党に依拠できると述べている。「私は自分から話をします、次のように自分から話をします。あなたは、君主主義的政党だけに頼ることができるのです。私たちには600万人が登録されている。これとともに多くのことを成し遂げることができ、私は他の政党も数えている（私の書簡におけるように）。秩序を作る価値があります。この勢力は、第1ドゥーマと第2ドゥーマの間において政府に対する堅固な支柱となりえます。」最後にツァーリはキレーエフに対して「気を落とさない」ようにと述べたとする。

その後、8月11日に、キレーエフは皇帝に対して覚書を書き終えた。来るべき第2ドゥーマを予見して、1) 君主は自己の可能性を考慮する。（自分の判断で出来ることをする）、2) 君主は保守的政党に支持を見出す、3) 6月3日のクーデタを完成させる（選挙法の改革を通じて、保守派をドゥーマに入れて、実質的にその性質を諮問的にするということと思われる）、4) 諮問的ドゥーマの援助を受けて、綱領に応じて統治することになる。これらは今までの提言の集大成である。

1907年11月16日、第3ドゥーマにおいて、ストルイピン（Пётр Аркадьевич Столыпин）首相は施政方針演説をおこなう。「歴史的な専制権力と君主の自由意思はロシアの国体にとり最も価値ある資産である」と述べた⁸⁾。すなわち、ドゥーマは君主の諮問機関にすぎないと断言されたのだ。これを受けて、12月15日のキレーエフの日記の記述には「ツァーリのスラブ主義的道への思想転回において、私のある程度の貢献があった。ツァーリに対して述べたまたは提示した演説や意見の痕跡があると考えてもおそらくは間違っていない」とある。スラブ主義的道への思想転回の重要な構成要素はドゥーマの諮問機関化である。それに対してキレーエフがある程度貢献したと自負をするのだ。

これ以降、日記にはドゥーマを巡る様々な事件とそれに関するキレーエ

7) Там же., стр.217.

8) 『ロシア史2：18世紀～19世紀』、407頁。

フの見解は記載され続ける⁹⁾。しかしドゥーマ運営の諸問題に関して、皇帝や皇后に直接働きかけるということはここで終わる。

※

ドゥーマを巡るキレーエフの議論と活動を簡明に記したが、その過程で、彼が皇帝のみならず皇后に対して働きかけていたことを示した。皇后が皇帝に対して一般的に影響力を持っているという以外に、皇帝の意思と性格が弱く、その意思の弱さを皇后が補う意義があった。

皇帝の意思の弱さを批判的に記述するキレーエフの指摘は枚挙にいとまがない。例えば、ブルーギン内相が革命の騒乱の中において動きが取れないことに対して、次のような可能性を指摘している。

「政府が全く存在しない。ブルーギンはあたかも自分を信じていないかのようである。もしくは、彼はツァーリの支持を疑っているのである！これはありうる！ツァーリは、一方の極端から他方の極端に移る。(1905年3月9日)」

専制を支持するキレーエフとしては、中心となるべき意志強固であり、肉体的にも強靱なツァーリが望ましい。1905年革命の怒涛の中、ツァーリの価値が下がる状況の中で、彼は知人の言葉として次のようなことを記している。「具体的な人物をもはや救うことはできない。それはいかなる利

9) 例えば1909年の海軍軍令部定員法案問題がある。4月27日、皇帝は、ドゥーマと国家評議会が可決したこの法案の裁可を拒否した。軍事分野における皇帝の権限に対する立法機関の侵害と捉えたのである。この日のキレーエフの日記には次のように皇帝の「自立性」を評価する記述がある。「両院が一つの方向の決議をしたけれども、陛下は従わなかった！これは非常に顕著な決定ではないか？陛下は自立を述べていたが、告白するがそれに対しては期待されていなかった。彼はこのことにより、議会の決議は彼にとっては義務的ではないという自立性を示したのであった。…問題ははっきりとした性格を帯びた。それは原理的な意義を持つのである。政府危機が始まり、そして陛下は自己の独立性を強調したのであった。」なお、8月27日、ストルイビンは、軍定員はドゥーマの権限外であるとした。

益にもならない。（専制の）原理を救おう（1906年6月25日）」と。これにはキレーエフの共感が含まれているのではない。

ロマノフ王朝の始まりにおいて、初代ツァーリ、ミハイル（Михаил Фёдорович）、二代目アレクセイ（Алексей Михайлович）が、ゼムスキーソボールにより選ばれたことによせて彼は次のように述べている。

「ロシア民衆はツァーリに対して次のように言うことができる。…私たちはミハイルを選んだ、彼に対して専制権力を与えた。後にアレクセイを選んだ、全く私たちのところには専制的なツァーリがいたのである。君、ツァーリ・ニコライは、継承によりこの権利を受け取ったのである。君は、専制君主になるためにはあまりに弱すぎると言っている。そうであるならば、私たちは君よりも強い誰かを探し、その人物をツァーリとするであろう。他方、君は平和のうちに帝位から去り、私たちの間で、欲する場所に生まれたい！君は誠実である（しかし弱く、不幸である）。この不幸な憲法に関する問題をいかにいじくり回しても、それはロシアの知恵の中には入らないのだ。（1905年12月24日）」

日記の中の戯言には違いないが、この記述の中に「専制君主になるためにはあまりに弱すぎる」とニコライ2世に対する不満が如実に現れている。

皇后の影響力は、キレーエフの見立てによれば、親族関係において発揮される。次のような興味深い記述がキレーエフの日記にある。

「ウラジーミル・アレクサンドロヴィチ（Владимир Александрович）の一番上の息子、キリル・ウラジミロヴィチ（Кирилл Владимирович）は、両親の希望に反して、教会の禁止や教会法の直接の指摘を顧みず…、自分の従姉妹である、マリア・アレクサンドロヴナ（Мария Александровна）の娘と結婚した。その娘は、皇后の兄、ヘッセン＝ダルムシュタット大公のかつての配偶者であった。通例の罰（勤務から追放）以外に、さらに大公の称号が剥脱された。ウラジーミル・アレクサンドロヴィチと〔その妻：引用者〕マリア・パーヴロヴナ（Мария Павловна）は、これに憤激

し悲しんだ。なぜならばツァーリが、彼の称号を剥奪しないかのように約束していたからであった。…罪が増えたことは、この場合においては、宗教的犯罪であると公的には説明されている。実際は、若い皇后の怒りのためである。しかしもしツァーリが罪を犯した者から称号を奪わないと事前に約束して、約束を守れなかったとすれば。…しかし、ツァーリの言葉に対して常に期待ができるというわけではないのだ。…少しの土地も譲らない。そしてサハリンの半分が譲られたのである。(1905年10月5日)」

人間関係が錯綜しているが、簡潔に表現すれば次のとおりである。キリル・ウラジミロヴィチ大公は、従姉妹であるヴィクトリア・メリタ (Victoria Melita) と結婚した。従姉妹との結婚は宗教的に許されない。そのために処罰を受けたが、通例よりも重い。軍務からの追放と称号剥奪である。重い処罰の理由は皇后の怒りである。キリル大公が結婚したヴィクトリアは、皇后の兄の前妻であったのだ。この件で、皇帝は称号剥奪のないことを約束していたのだが、守れなかった。日露戦争の講和において、少しの土地も譲らないと言っていたのに、サハリンの半分を譲ったのと同じであるということだ。ただし、10月5日付の皇帝の皇太后宛の書簡においては、皇帝はキリルの称号を返還する意向であることが示されている¹⁰⁾。ここからすれば、キレーエフの皇帝評は厳しすぎるとせざるを得ない。なお1907年に、ようやくキリルの結婚は皇帝により承認を受けている。他方、皇后の政治向きの影響力はどうかとキレーエフは自問する。

「家族問題においては、若い皇后の疑いのない影響力が感じられる。彼女は、キリル・ウラジミロヴィチ処罰における決定の厳格化に影響を及ぼした。しかし彼女は政治に影響力を有するのか。思うに、きわめて蓋然性が高いのであるが、彼女は配偶者をして、現存する重大な条件を考慮せずに「法令化される」、完全に抽象的性質を持つ子どもの筆跡のような、一般的な考えや方策に向かわせている。それらは私たちの生活の構造の中に

10) Sergei Mironenko, Andrei Maylunas, *A Lifelong Passion: Nicholas and Alexandra: Their Own Story*, New York, 1977, p.282.

納まらず、あらゆる準備なしにそれに押し付けられたものであり、それ自体は素晴らしいが（自治、言論の自由、集会の自由など）有害であることが判明しており、上から押しつけられたものであり、私たちの構造の中に有機的に位置づけられていないのである。（1905年10月16日）」

キレーエフは、皇后は政治面でも影響力があると考ええる。皇后は皇帝をして「現存する重大な条件を考慮せずに「法令化される」、完全に抽象的性質を持つ子どもの筆跡のような、一般的な考えや方策に向かわせている」とする。いささか難しい表現であるが、例えば自治、言論の自由、集会の自由が例示されていることから、立憲的方向性であると推察される。

キレーエフ日記ではこの関連でもう少し直接的な表現を用いて記述している箇所がある。

「皇后が、立憲主義的統治様式を支持することを助言していると私は思っている。これにより革命を宥和することを考えている…。まさに幻想である！（1907年1月27日）」

「多くのもの（その中には若い皇后もいる）は、すべての国家はこれ〔立憲主義：引用者〕を通過するはずである、ロシアもそれを通らせしめよと述べている。しかり、これは全く必然ではないのである。皇后は次のように述べる。「私たちの小さなアレクセイが、私たちは大いに苦しめられていると周囲に示さずに、統治することさえできれば…」と。（1907年3月26日）」

キレーエフの考えによれば、皇后が立憲主義に傾いているのは、革命を宥和するためであり、また立憲主義はすべての国家が通過すべき段階であるとみているからであるとする。すなわち皇太子が健やかに統治できるように、ロシアをして立憲主義を通過させるべきであるとするのである。

皇太子の御代のためという動機が、皇后の考えの中心にあるという指摘は、それ自体きわめて正しい。しかしだからといって、皇后が立憲主義に好意的であったとは理解しがたい。皇后の政治的活動が詳細に研究されて

いるのは、第一次世界大戦期、それもニコライ2世が総司令官として前線に向かったのちのことである。その時期においては、皇后の活動は、皇太子の治世のために、専制権力を強化する方向に向かったと概括できる。すなわち立憲主義を迎え入れるということには決してならなかったのだ。

またキレーエフの日記の中を通じて、皇帝と皇后に対してある種の批判が貫かれている。両者が神秘主義にからめとられて、視野狭窄に陥っていることである。まとまった形としては次のように表現される。

「神秘主義がいかに皇帝と皇后の思考をしめているかに驚かされる。これはすべてフィリップ（Philippe）の一团である。彼らは、大公たち、すなわちモンテネグロ人と大公ニコライ・ニコラエヴィチに影響を行使し、そして次のように断言した。ツァーリは、東方の輝けるツァーリとなることが差し迫っていると。そしてツァーリと皇后はこれを信じて、さらにロジェストヴェンスキーの勝利さえ信じていた。すでに私たちの敗北の後、そして対馬のかなり前に、太平洋における欧州国家の利益の守護者となるという私たちの意向に関する空想的なマニフェストが出たのであるから。皇太后はこの期待に対して苦い涙で答えたが、彼女の…不平や助言は、非常に冷淡に受け止められた。（1918年1月15日）」

フィリップとはフランス人の「催眠療法士」である。モンテネグロ国王の2人の娘ミリツァ（Млилица Николаевна）大公妃、アナスタシア（Анастасия Николаевна）大公妃が主宰するサークルの中で、皇帝と皇后に紹介される。ニコライ2世日記の1901年の項目には、フィリップが「わが友人」として頻出する。

裏付けが取れない日露戦争に対する影響よりも、皇帝と皇后とフィリップを結ぶカギは、男子出生であると筆者は今のところ判断している。皇后は、1901年までに4人の子どもを出産したが、すべて女子であった。世継ぎの男子出生を彼女は望んだ。そのために1902年8月には、皇后の想像妊娠のスクヤンダルまで起きた。8月20日のコンスタンチン・コンスタノヴィチ大公の日記には、このスクヤンダルに関する詳細がまとめられてい

るが、想像妊娠とフィリップの関係を示唆し、またこの人物のいかがわしさを示している。

「どのような根拠であるか私は知らないが、このフィリップ [ママ] は、皇后が女兒ではなく男児を出産するために、皇后に対して影響を与えたと推測されている。セルгей・ミハイロヴィチ (Сергей Михайлович) は私に対して次のように述べた。フィリップに関する政治的に望ましくない報告がパリから私たちの秘密警察の主要なメンバーにより得られ、そして皇帝はこのエージェントの24時間以内の解雇を命じ、このためにオフラナは非常に困難な立場となった、そのエージェントは政治犯に関するすべての情報を持っているようであるからだ¹¹⁾。』

なぜこのような神秘主義に皇帝夫妻はとらわれるのであろうか。簡単に理由を説明することができないが、そのカギの一つとして、キレーエフは、皇后が人間嫌いであり、ロシア社会から孤立していることを指摘している。

「ツァールスコエに行った。若い皇后は、彼女が好かれていないこと、彼女が大いに罵倒されていると考えている。彼女は人気を得ることが困難ではないであろう。しかし彼女は脇に寄り、人間嫌いである。…

若い皇后は、自分自身の保育所に去った。「世間」を見る決意がなかった。これは、ツァールスコエ・セローとペテルゴーフにおいては非常に容易であった。しかし好かれていないと考えて、自らのところに種々の人物、旧姓タネーエヴァ、ヴィルボヴァ (Анна Александровна Вырубова) のような望ましくない人物を近づけた。彼女らは常に一緒にいて、一日中電話をしている。…ヴィルボヴァは、皇后のために祈り、皇后に無限に忠実であり、皇后は彼女を信じ、ついに忠実な人物を発見して喜んでいる…ヴィルボヴァは取るに足りない…公衆の間ではこれが誇張される。大量の

11) *Ibid.*, p.218.

贈り物、ブリリアント型ダイヤモンドについて話されている。皇后は彼女に対して良いブローチを一個贈っただけであり、それが全てである。

フィリップ一味の支配は終わった。しかしそのかわりに佯狂者が現れた。その一人の、ミーチャ某は、巡礼における雷雨の際に歪められた（ペテルブルク付近）。彼は突然体を真っ直ぐにした。ああ、当然、奇跡である！別のもの、これもまた佯狂者である。そしてツァーリとツァーリツァに近づくすべてのものは、受け入れられている。（1908年2月20日）」

1903年以降は、冬季に恒例の皇帝皇后主催の舞踏会も行われなくなり、皇帝夫妻はペテルブルク近郊のツァールスコエ・セローに引きこもることが多かった。その中で、皇后は文中にあるように何の変哲もない、単に皇后に忠実なだけの侍女ヴィルボヴァを偏愛する。その偏愛は異常とみなされ、世間では両者に関する噂が独り歩きし、誇張される。単なるブローチの贈り物がブリリアント型ダイヤモンドに変化する。さらにキレーエフが懸念することに、フィリップの影響力が減じても、また新たに狂人を装う人物が皇后の周囲に集うことが記されている。ロシア正教ではこのような人物が、神の代理人として尊重されたのであった。ここでは佯狂人はミーチャ某とその名が記されるが、あの有名な人物の名ものに記される。

「皇帝の家族に対するフェオファン（Феофан）の影響力についてストルイピンは知っていて、この不幸がいかなる程度であるのか意識している。しかし何をなすべきなのか？おそらくは「グリーシャ」に対して、ある種のマスコットのように見ることである。彼が「幸せ」を運ぶと？！しかしこのような影響力は、非常に望ましくない形をとるかもしれないから！（1909年6月13日）」

すなわち、グリーシャ、すなわちグレゴリー・ラスプーチン（Григорий Ефимович Распутин）が、皇后の聴聞僧であるフェオファンの仲介、またここには明示されていないがアナスタシア大公妃やニコライ大公の仲介を経て、またヴィルボヴァが窓口となって、皇帝の家族に入り込むことと

なる。キレーエフは、ストルイピン首相とともに、「グリーシャ」の皇帝や皇后に対する神秘主義の影響力を懸念しているが、彼を幸せを運ぶマスコットと考えるしかないと諦観している。

むすびにかえて

キレーエフ将軍の日記を読解しても、結局のところ、第一次ロシア革命から第一次世界大戦までは、皇后の政治関与はなかったとする通説を崩すことは難しい。キレーエフが、国民大会の実現により皇帝と民衆の絆を復活させるために、皇帝のみならず皇后に働きかけた事実はある。しかし皇后が皇帝に対して実際に働きかけたのか、その結果はどうであるのかは不明のままである。キレーエフ自身は、自分の働きの結果、ある程度は事態が動いた、ドゥーマの諮問機関化に貢献した旨を日記に記しているが、それは単に自己の認識を述べているにすぎない。他方、簡素なニコライ2世日記を見ても、キレーエフの名前が明確に出ているのは、拙論の時期に関しては1か所にすぎない。キレーエフ自身が皇族に近く情報通であることは間違いないにしても、皇帝の側から名前を意識されることはあまりなかった。すなわちキレーエフの皇帝に対する影響力もその程度のものにすぎなかったのであろうか。

キレーエフ将軍の日記を読解して明らかなのは、皇后の置かれた厳しい状況である。意思が弱いとみなされている皇帝を彼女が支えざるを得なかったのは周知のことである。そして彼女が神秘主義に救いを求めたのは、拙稿では世継ぎの男児出生に絡めて書いたが、それだけではなく皇帝を助けるためでもあった。例えば、断片的に残っている皇后の皇帝宛書簡（1902年7月22日）においては、ドイツに向かうニコライに対して皇后は次のように強くあれと励ます。「私たちの親愛なる友人〔フィリップ：引用者〕はあなたの近くにおいて、ヴィルヘルムの質問に答える助けをしましょう。友好的でかつ厳しくあってください。そうすれば彼はあなたをからかうべきでないと理解し、あなたを尊敬しあなたを恐れるようになるでしょう。これが重要なことです。私があなたとともにいれればと思いま

す¹²⁾。』

キレーエフ将軍も皇帝の意思の弱さを問題としていて、それを批判的に述べている。その反動であろうか、皇太子アレクセイに対する彼の評価はすこぶる高い。「皇太子については多くの感じのいいことが語られている。彼は観察眼のある子どもであり、「鋭い」。皆に対して質問をする。近くにいるものは彼の中に将来のピョートル大帝を見ている。(1907年10月17日)」批判力の強いキレーエフでさえ、「将来のピョートル大帝」という皇太子側近の評価をそのまま受け入れている。

「小さな皇太子に関しては、非常に心慰められることが語られている。大きな意思を持っていると言われるし、非常に聡明である。しかし彼は4歳であるのだ！それゆえに、少なくとも12、13年待つ必要がある！（1909年3月22日）」

このように皇太子は聡明であるが、1909年においてはまだ4歳。即位まであと12、13年が必要とされる。当時極秘にされていた皇太子が血友病であることは、さすがに、キレーエフには伝わっていない。少なくとも日記には記されていない。皇太子の病気が、皇后の神秘主義への耽溺をつなぐミッシングリンクでもあり、その心労のために皇后の健康が蝕まれたのだ。1905年革命以降、皇后の肉体的にも、精神的にも健康は悪化しがちであった。それはキレーエフの日記にもグロテスクな形で次のように記される。

「かわいそうな皇后は回復しつつある。しかしきわめて緩慢にである。彼女は太陽が必要である。しかし彼女は幽閉から出ることができない。彼女だけで行くことを欲しないのである。彼女の神経はひどく動揺している。彼女の夢の中において、彼女の夫や息子が殺害されるという種々の恐ろしいことが立ち現れる。彼女は興奮して常に跳び上がる… (1908年3月

12) *Ibid.*, p.216.

22日)」

神経を崩している原因が如実に彼女の夢に立ち現れている。夫や息子が殺害される夢を見て、恐怖に打ち震えるのである。それゆえに神秘主義にすがらざるを得ない。

「リヴァディアからの良くない知らせ。皇后の神秘的態度は継続している。フェオファンにより入れられたキリスト教信者がリヴァディアに呼び寄せられている！しかし、神よ、これはキリスト教的信仰であろうか？これはあのフィリップと同じであるから。私たちをして対馬に至らせたのと同じ迷信である。(1909年11月7日)」

キレーエフの懸念は的中した。この記述で指摘されているキリスト教信者＝ラスプーチンがロマノフ朝に対する信用を壊したのであるから。